

5 教理形成と対決した思想—グノーシス主義・マルキオン主義・モンタヌス主義

(1) グノーシス主義

グノーシス主義とは、キリスト教史の初期の時代（特に二世紀に全盛期を迎える）の宗教運動の名称。この運動は、神の知および人間の本性と運命の知を重視し、そこに基礎を置くものであった。人間の本性と運命そして神についての知は、人間の魂を宇宙の諸力の支配から解放し、悪しき物質世界から人間を救いだし、宇宙についての真の認識に到達させるものと考えられた。

グノーシス主義は、古代の宇宙像へのアンチテーゼとして理解することができる。古代ローマ帝国時代の宇宙像は、プトレマイオス天文学の基本に観察されるように「同心球構造」をもっており、神・第八の恒星天・七つの遊星天・月下界・偶然と無常の支配する地上に区分され、上から神・星辰世界・月下界・地上世界という階層をなす。そのうち神・星辰界・月下界は、神的領域（魂の故郷）を構成する。しかし、神のいる英知界から離れれば離れるほど、神的影響力は衰退していく。

このような世界像に対して、グノーシス主義は星辰世界をも悪魔視し、「自己」が身体、地上世界のみならず、星辰界にも敵対していると主張する。このように古代の宇宙像を全面否定しながら、独自の宇宙像や人間観、救済論を持つところにグノーシス主義の特色がある。以下グノーシス主義の思想の特色をいくつか挙挙することができる。

- ①極端な反宇宙論的な二元論。光と闇、
- ②知られていない超越的な真の神と造物神（デミウルゴス・アルダバオート）とを区別する。そして造物神は、過誤から可視的世界を創造し、その世界は神的領域から断絶された悪の領域と考えられる（但し文書によってその悪の度合いは異なる）。超越的な真の神は、「存在しない神」であり、人間の言語や表現を越えていて、否定的言辞でしか言表されえない存在（一種の否定神学）。この神が、多様な仕方で流出していく。そして造物神も生み出され、可視的世界を創造する。
- ③人間は、その真の本性上、神的な存在に本質的に近いものであり、天的な光の火花が物質世界に閉じこめられたものであると考える。人間は、「人間」という名の神が、自分の姿、つまり人間の姿を造物神の前にあらわし、造物神はそれを見て、配下の諸力（アルコーン）を集めて、その形に従って人間を創造し、彼らに現れた人間をその中に閉じこめようとする。
- ④人間の現在の状態とそこからの解放への熱望を説明する多様な神話を持つ。
- ⑤人間の救いは、物質に幽閉された神的本性が、そこから解放されることによってもたらされる。

グノーシス主義の発祥や起源については、はっきりとはわからないが、キリスト教の起源と

ほぼ同じ時期のユダヤ教の周縁にあると考えられている。その理由は、ナグ・ハマディ文書中に、『アダムの黙示録』『ヨハネのアポクリュフォン』『この世の起源について』などキリスト教的な要素をほとんど含まないか、含んでいても本質的ではなく、旧約聖書とユダヤ教に対する価値転倒的な解釈（例えば創世記の人間の創造のパロディ的解釈）が、ユダヤ教に通じた作者と読者を前提にしないと説明できないものがあること。さらに、マンダ教などクムラン教団との平行性を明らかに認められるものがあることなどによる（大貫隆『グノーシスの神話』28頁参照）。

さて、キリスト教グノーシスの先駆は、使徒言行録にも出てくる魔術師シモンやケリントスというような人物を考えることができる。しかし、一定の体系を持ったグノーシス主義は、二世紀半ば、バルベロー・グノーシス主義やセツ派、オフィス派などを挙げることができる。

- ①バルベロー・グノーシス主義 神話中にバルベロー（意味不明）という神的存在を前提とする。『ヨハネのアポクリュフォン』
- ②セツ派 アダムの第三子セツの子孫と自己認識する集団。『ヨハネのアポクリュフォン』『エジプト人の福音』『アダムとエバの黙示録』『アルコーンの本質』『セツの三つの柱』
- ③オフィス派 ギリシア語でオフィス（蛇）がこの派の思想では救済論上重要な役割を果たす。但し、ナグ・ハマディ文書では、創世記3章の蛇は、すべて積極的役割を担っているというわけでもない。

以上のような二世紀半ばから、さらにしっかりとした体系を持ったグノーシス主義が生まれ、信奉者を獲得していく。バシリデースやヴァレンティノスがそれらの代表である。とりわけ、ヴァレンティノスは、最大のキリスト教グノーシス主義者であり、正統教会にとっては、最大の異端。弟子プトレマイオス、マルコスがいた。神々が充満する領域（プレローマ）、その下に中間界、さらに最下位の物質と暗黒の闇の世界を想定し、すべては上位のものが下位のを流出するという原理から説明される。さらに、マニ教も古代グノーシス主義の集大成と呼べる。マニ教はナグ・ハマディ文書に見られる「シリア・エジプト型」の神話とは基本的に異なる神話を持ち、善と悪の二元的対立というゾロアスター教の世界観に基づく。このゾロアスター教の基本構造にマンダ教、ユダヤ教、ギリシア神話、オリエント諸宗教のモチーフや神話が摂取され、独特の体系を形成する。

彼らは都市に独自の宗教集団を組織し、洗礼や聖餐、塗油等一定の儀礼を行っていたと考えられる。特に水による洗礼は、広くグノーシス集団に一般化していた。また正統教父たちは、グノーシス集団の淫行を記録しているが、実際は一種の禁欲生活をも実践していたのではないかと想像される。そして、古代末期の都市の知識人層を主要な担い手として、ラディカルな古代の宇宙像批判から、一定の政治的・社会的プロテストを思想に内包するという特色も持っていた。

ナグ・ハマディ文書の一つ『アロゲネス』(NHX I, 3 50, 21~34)に次のような1節ある。

「ユーエル〔天使〕は私に言った。『アロゲス〔ギリシア語で異邦人。一種の秘儀参入者〕よ、万人がこうした事柄を理解できるわけではない。汝は万物の父により強力な権威を身に着けた。…それは、識別困難なものを識別し、大半の者には認識不可能なものを認識して、汝自身のもとへと立ち帰ることができるようになるためである』(邦訳『ナグ・ハマディ文書IV・黙示録』(邦訳244頁)

ここに示されるように、グノーシス主義の反宇宙論的二元論は、一方で真実の知(グノーシス)に参与することによる限定された秘儀参入者の救済概念を生み出し、他方で世界全体の悪と不十分性を前提とすることになる。このような姿勢は、救済概念を保持している点では、キリスト教と接点を有しているとは言え、まったくキリスト教の教理と合い入れないことは明かである。従って、初期キリスト教の教父たちが、徹底してグノーシス主義論駁に多大なエネルギーを費やしたのも首肯できるのである。

エイレナイオス『異端反駁』(180年ごろ)、ヒッポリュトス『全異端反駁』(230年ごろ)、エピファニオス『パナリオン(薬箱)』(375年ごろ)などが、古代の主要な反グノーシス文書である。

2~4世紀の教父たちは、具体的な可視的教会共同体の維持運営に責任を負うとともに、その共同体の教義を可視的教会の神学と整合性を保つ必要が常にあった。グノーシス主義者は、しばしば既成の組織を批判し、自ら使徒の権威の継承を主張し、独自のヒエラルヒアを結果として創ることになる。またグノーシス主義の教えが、キリスト教の本質と完全に対立したからである。とりわけ、キリスト論、救済論、創造論などについて言える。

例えば、2世紀前半にアレキサンドリアで活躍したバシリデースは、その地で、グノーシスの一派を形成した。かれは、自己の教説の正当性を主張するために、自己を使徒の系譜に位置付け、自身が神的秘義の保持者であり、その秘義は、ペトロの弟子の一人を介して、イエスにまでさかのぼりうるのだと述べる。エイレナイオスによれば、この「弟子」とは、グラウキアス、ヒッポリュトスによれば、マチアスとなっている。

→「バシリデースの教説—ヒッポリュトス『全異端反駁』『ナグ・ハマディ文書I・救済神話』251頁以下)

バシリデースの神学の特徴 ①一種の厭世主義、つまりすべての魂は罪によって汚れており、受ける報いは自己の過誤に対する報いに他ならない。②唯一で名付けることのできない神は、この世界から無限に隔たっている。創造は劣った神、アルコーンの最下位のもの、デミウルゴスによる。③仮現論的キリスト論—キリストの一切の人間の属性を否定、キリストは受肉せず、十字架の上で苦しんだということはありません。キリストの苦難は、かれの神

的本質とは両立しえない。ゆえに、新約聖書の証言するキリストの受難は、キリスト自身の受難ではなく、キレネ人シモンがキリストの代わりに、十字架を負い、十字架にかけられたというのが真相であるとする（エイレナイオス『異端反駁』Ⅰ・24・4）

（2）マルキオン（70年頃～150年頃）

マルキオンは、小アジアのシノペ（ポントス州の黒海沿岸の港町）に生まれる。司教の子で、裕福な船主となる。130年頃、ローマに来て、ローマの教会に加わる。すでにキリスト者となっていたと思われる。そして、多額の財貨を教会のために捧げた。しかし、ローマでグノーシス主義者ケルドンの影響を受ける。ケルドンは、「モーセと預言者たちが説いた神は、イエス・キリストの父ではない。一方は可知的だが、他方はそうではない。一方は単に義であるのみだが、他方は善である」（エイレナイオス『異端駁論』Ⅰ・27・1、ヨナス『グノーシスの宗教』189頁より）。但し、マルキオンの思想をグノーシス主義の一つに位置づけるかは議論がある。ハルナックは否定的に見ている。なぜなら、グノーシス主義としては特異な側面多々あるからである。例えば、キリストの受難を真剣に受け止める。また旧約聖書と新約聖書のアレゴリカルな解釈をとらない。またグノーシス主義に特有な混淆主義（シンクレティズム）と無縁。パウロと同様、知識ではなく信仰を救済の根拠とした。しかし、グノーシス的な側面もあることは事実である。反宇宙論的二元論、造物主に対する知られざる神という観念、造物主によって想像された悪しき物質世界からの解放としての救済観など。これらはグノーシス主義の特色を示す。

マルキオンは自ら意図して、教会の改革者、預言者、刷新者となろうとしたというより、イエスの真正な使信を説教しようとした。マルキオンは当時の教会が、イエスの真の福音を歪曲していると考え、聖書の使信の中心はイエス・キリストにおける神の愛によってもたらされる人間の救いにあると確信した。しかし、この確信は、やがて旧約聖書の神が、その使信（つまり愛の神という使信）と矛盾する審判者の神、義なる神にして残虐にして災いをもたらす神（イザヤ書45：7、テルトゥリアヌス『マルキオン駁論』Ⅰ・2参照）であるとの確信に至る。

マルキオンは、この神はイエス・キリストの御父なる神とは異なると結論づける。イエス・キリストの父なる神は、我々人間にイエス・キリストを遣わして下さることに示されているように、まったく慈愛に満ちた方である。ここから、マルキオンは独自の教理を展開する。

- ①慈愛に富む神、イエス・キリストの御父は、旧約聖書の神（つまり世界の創造者にして主なる神）とは区別されなければならない。
- ②旧約聖書は、キリスト教信仰の根拠としては拒絶されなければならない（ユスティノスは『第一弁明』26・5で、「この人物〔マルキオン〕は、今日でもなお存命し、信奉

者に教えを述べています。造物主（デミウルゴス）とは別の、より大いなるあの神の存在を求める立場です。彼は悪霊の支配を通じて、あらゆる民族の多くの人々に冒涇を語らせ、このわれわれの宇宙の創造者なる神を否定させました。・・・」と述べている)

マルキオンは、旧約聖書の神と新約聖書の神を固有の対立した存在とみなす。

旧約聖書の神→律法、義、審判者、世界の創造者、デミウルゴス

新約聖書の神→福音、慈愛、救い主、御子の派遣、より至高なる神

人間は、創造者なる神の一被造物、人間は神の「かたち」。しかし、この神は被造物をして、律法に服従せずに死へと陥ることも許容させるような存在（テルトゥリアヌス『マルキオン駁論』Ⅱ・5）

反対に、別の神（新約聖書の神）は、人間に対して何の約束もしなかったが、キリストを罪の赦しのために派遣することによって、罰し裁くことをせずに、慈愛をもって接し給う。この神を信じる者は、狭い律法主義から解放され、新しい生命が可能となり、新しい生き方、道徳が生まれる（テルトゥリアヌス『マルキオン駁論』Ⅰ・27）。

こうして、マルキオンはグノーシス主義の帰結をさらに徹底化していき、禁欲主義的生活を実践したと考えられる。物質界は悪ゆえに、禁欲生活を行う。肉食と性の交わりは、旧約聖書の神の術中に入ること。

144年頃、かれは破門され、分離教会を形成し、信奉者を集めた。牧会書簡を除くパウロ10書簡とルカを編纂。典礼はローマ典礼と類似。エルサレムのキュリロスは、キリスト者に誤ってマルキオンの教会に入らないように警告しているほど（『洗礼志願者のための秘義講話』4・4）マルキオンの異端は、成功を収め、各地に伝播したのである。150年頃までには、ローマ中に拡大。他の教会の脅威となる。

マルキオンは、新約聖書諸文書を集成した最初の人物。ルカ福音書を要約した福音書と10のパウロ書簡（Apostolicon）から成る。牧会書簡とヘブル書は、非パウロ文書として除外された。またマルキオンは、エフェソ書の標題をラオデキア人への手紙と変えた。マルキオンの出現は、旧約聖書と新約聖書の関係が考察され、聖書の正典化が促された。

マルキオンによれば、旧約と新約、律法と福音の間には、明確な差異が存在する。さらには、旧約の創造者なる神ないしはデミウルゴス（より劣った神）と新約の最高神とは区別される。創造者なる神の無力さ、無知、邪悪さは、旧約を通して明らかになったのである。アダムを創造したのものとして、神は悪がこの世界へと入ったことに責任を有していた。神は、すべてのことを知っているわけではなく、アダムをそこに見出すことができなかった。それ

ゆえに、エデンの園で、木の間に身を隠したアダムに「あなたはどこにいるのか」と問わざるをえなかったのである。

マルキオンによれば、この世界の不完全さは、デミウルゴスの不完全さの反映である。デミウルゴスは、刻んだ像を造るのを禁じた後で、モーセに青銅の蛇をつくることを命じている。さらに、復讐のユダヤ教の神は、「目には目を、歯には歯を」と教えた。

それに対して、キリストは、敵を愛せと命じられた。新約の神のみが神と呼ばれるにふさわしい神である。マルキオンは、旧約の預言者たちがその到来を予言したメシアは、新しい摂理のもとでのキリストと同一視されるべきではないと考えた。ユダヤ教のメシアは、ユダヤ人を離散から連れ戻したが、なお新約のメシアは世界の人々を救いへと導くことができるのである。

マルキオンのキリスト論のもう一つの重要な側面は、その仮現説であった。マルキオンは、キリストが処女より生まれ、キリストの身体が物的なものであることを否定した。このような仮現説は、物質は悪であるというマルキオンの信念に由来した。したがって、地上の身体は、神的なものが宿る場所とはなりえなかったのである。

マルキオンは、ルカ5：36～37「だれも新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい服も破れるし、新しい服から取った継ぎ切れも古いものには合わないだろう。また、だれも新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりしない。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は、革袋を破って流れ出し、革袋もだめになる・・・」をガラテヤ書2章（パウロ自身が、2章19節で、「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです」と語る）を手がかりに解決した。

⇒ パウロは〔律法を重んじる〕先輩の使徒たちに反対し、真理を告知した、

⇒ 律法と福音とは互いに何の関係もない。「律法と福音の分離が、マルキオンの固有かつ主要な業である」（テルトゥリアヌス『マルキオン駁論』I・19）

マルキオンは、旧約の宗教をキリスト教とは何の関係もないものとして拒絶したが、旧約が何らかの価値を有することまでは否定しなかった。マルキオンは旧約を過去についての正確な歴史文書とみなし、さらにユダヤ民族についての歴史文書として捉えた。マルキオンは、個々の節を文字通りに解釈し、アレゴリカルな釈義の方法を拒絶した。

古代の教父たちが、マルキオンを非難した理由は、マルキオンが苦難のメシアを、旧約預言の成就としてみるすべての試みを非難したところにある。マルキオンは、旧約聖書を倫理的な戒めとして捉え、キリスト教の時代の開始までは効力を持っていたと理解した。

新約聖書については、マルキオンは、パウロのみが正しくイエスの教えを理解したと信じ、12使徒を修正されたユダヤ教を教えたユダヤ主義者と考えて拒絶した。マルキオンは、ガラテヤ1：8～9から、唯一の福音が存在すると考え、それをパウロの友にして同僚のルカと同一視した。他の福音書は、ユダヤ教の影響で穢れたものとみなした。ルカは、元来の福音にもっとも近いが、それでもユダヤ主義者によって浸透され、ルカもまたユダヤ主義者によって改変され捨てられるべき要素を含んでいたと考える。

(3) モンタニズム

二世紀から三世紀初頭にかけて小アジアで起こった宗教運動。恍惚状態になって、預言をする指導者たちによって形成され、「フリュギアの異端」の名で知られた。(史料：エウセビオス『教会史』参照)。モンタニズムという名称は、この運動の創始者であり、また自ら最初に預言活動を行ったモンタノスの名に由来する(紀元170年頃)。モンタニズム運動に加わって預言活動をした人々は、神から直接の啓示を受けたことを主張し、恍惚状態となる宗教経験ゆえに、自分たちの宗教上の規律や訓練を整え、断食や禁欲、終末への備えを行った。モンタニストは、真の預言は意識を失った恍惚状態で語られるものと考え、より厳格な規律と訓練という点で、カトリック教会と異なっていた。しかし、彼らが教理的な意味で、異端であるという嫌疑は、見出すことはできない。

彼らは、天のエルサレムが天から降りてくる時が近いと宣教し、人々はそれを待ち望むべく、結婚を解消し、ペプザに集うように勧めた。⇒ エピファニオス『全異端反駁』49・1・2～3 → バイシュラークによれば(217頁)、天のエルサレムの到来を指摘することによって、キリストが婦人(第4エズラ9:26、38に従って)「シオンの娘」の人格化として見ようとしたものである。→ 教理史的に見ると、このことは、キリスト論が黙示録的待望に徹底的に吸収されていたことを示すものである。→ このことは神学の喪失を意味する。

終末の実現がただちに起こらないと見るや、モンタヌス主義者たちは、パラクレートスと霊の賜物の承認、厳格な禁欲生活、結婚の一回性、断食などを要求する一種の禁欲的集団になっていく。テルトゥリアヌスというラテン教父は、このような禁欲主義集団となったモンタニズム運動に参加したと考えられている。

モンタニスト運動の勃発の年代は、確定はできないが、170年頃と考えられる。「新しく洗礼を受けた」モンタノスという名のキリスト者が霊による恍惚状態の預言を始めた(エウセビオス『教会史』5・16・7)。南フリュギアのアルダバウという村で、モンタノスにすぐに従ったのは、二人の女性預言者マクシミラとプリスキラであった(5・16・13)。小アジアのキリスト教は長い間、ヨハネ福音書を重んじ、助け主(弁護者、パラクレートス)の約束を待望していた。またヨハネ黙示録の終末的な預言の舞台でもあった。フィリポの娘(使徒言行録21:10。フィリポには、預言をする四人の未婚の娘がいた)は、小アジアに住み、女預言者であると考えられていた(5・17・3)。そのような集団が、モンタニズム運動の発端の背景となったと考えられる。従って、異教の密儀宗教やユダヤ教の影響よりも妥当と考えられる。

モンタニズム運動は、小アジアを中心に広範囲に伝播していったと見られる。運動の進展とともに、モンタニズムの恍惚状態の預言の真正性をめぐって論争があったと考えられる。モンタニズムは、例えばイザヤ書63:9の七十人訳テキスト「天使でも使者でもなく、父なる神、主である私が来る」を、切迫した終末の到来の預言として解釈し、自分たちの運動

を正当化した（エピファニオス『パナリオン』48・11・9英訳 The Panarion of St. Epiphanius, Oxford, p. 170f, Cataphrygians）。

論争は、やがてそれを終結させるための会議の開催を促す。それらは、キリスト教史における最初の地方教会会議の実例となる（エウセビオス『教会史』5・16・10）。論争は、177年までにローマに拡大し、そこでモンタニストたちは司教エレウテルスによって追放に処せられた。

後にいわゆる異端とされる集団、キリスト教教理形成と対決した思想と思想運動、すなわちグノーシス主義、マルキオン、モンタニズム運動を教理史全体としてどのように見るか。（バイシュラーク218頁）

バイシュラークによれば、これらは、「いびつな三位一体的形姿」をとった。

- ①ユダヤ人・キリスト教 → 第2の信仰箇条（キリスト）を代価とした第1の信仰箇条（神）の解放として
- ②マルキオン主義 → 第1箇条を代価とした第2箇条の解放
- ③モンタヌス主義 → 第3箇条の絶対化
- ④グノーシス主義 → 第1箇条と第2箇条をつなぐ決定的な出来事「受肉」の無意味化。

いびつな三位一体的形姿 → 信仰の決定的規範形態として「キリスト」ではなく、「キリスト者」もしくは原始キリスト教的関連集団の登場。⇒「キリスト」から「キリスト者へ」
⇒ これとは対照的に、教会の立場に立った二者択一はただキリストの出発点にのみある。